

## 緑の誘惑

吉岡 一 埼玉県大里郡 十五歳

緑の絵の具は、すぐに無くなる。僕の描く絵は緑でいっぱいだからだ。

毎年美術の時間に風景画を描く。有名な山や川や建物などない、田舎町の風景。のどかな田園と名もない小高い山。山桜の混じる雑木林。道路際の貧弱な街路樹と旺盛な雑草。どこを見ても緑しかない僕の町。だから、どうしても緑は使う。画面のほとんどが緑だ。

緑って一言でいうけど、いろんな緑がある。春の新緑のみずみずしい白いような黄緑色はどうしたら表現できるか。すつくと天を刺す杉の木の重厚な深い緑は、黒に近いが黒を混ぜたらおしまいだと思う。パレットにいくつもの色を重ね、それでも自然の色にかなわぬ己の絵にため息をつく。

植物の色は同じ季節でも種類によって違うし、同じ植物でも季節によって違う。葉を観察すると、葉裏は違う色もあるし、千差万別だと思う。近くで見れば、葉脈の美しさに感動し、木を見れば、風でしなやかに揺れる葉のダンスにうっとりする。クヌギ、コナラ、アカマツ、山桜の雑木。どうしてもそこに根付いたのだろう。風のいたずらか鳥が運んだか。動けない植物は運を天に任せ、己の運命を受け入れ精一杯生きている。

僕と同じように、緑の誘惑に見せられた鳥たちがやってきた。シジュウカラやコゲラは楽しそうに、ヒヨドリはやかましく。ああ、また緑が足りなくなかった。お母さんに言って、買ってきてもらわないと。